

偉大なる奇蹟の人 高橋正二先輩を偲ぶ

東京鷹桜同窓会と高橋正二先輩



高橋正二

信夫人

平成20.9.12

我らの偉大なる先輩、高橋正二さんが平成20年6月16日、静かにご逝去なされた。95歳だった。

高橋正二先輩は山形県立長井中学校を昭和7年に8回生として卒業され、その後の長い人生を、その時代を生き写すように世にも稀な生き方をなされた奇蹟的な運命の人であった。

私は後輩の一人として、心から尊敬し誇りに思っている。いま、その先輩の生き方を偲ぶ。

高橋正二先輩は大正2年1月29日、東置賜郡大塚村に男だけ三人兄弟の末っ子として生まれた。尋常小学校高等科を卒えて中学校に入学、同期に、首席を競った守谷辰雄（後、数学の先生）が居られる。

昭和7年、第8回生として卒業。

折りしも、昭和4年にアメリカに端を発した世界大恐慌が日本も襲い、騒然とした暗い世の中、

高橋正二先輩と私（木村）

高橋正二先輩は昭7卒、私は昭28卒で、20年以上の大先輩、軍隊の階級では比較にもならない。しかし同窓とはありがたいもので、何かとご指導・ご面倒を見ていただいた。同窓会では勿論、山形県人会でも副会長や総会実行委員長

を務められ、いつもお手伝いさせていただいた。又、私が心の拠り所としていた、薩摩の焼酎を飲む会の「アサヒ会」には、亡くなられる前年まで、ご夫婦で出席なされ、みんなに「ためになる話」と称して興味ある話しをしていたり、身近にご指導いただいた。

——木村 繁（昭28卒）記

昭和6年秋、満州事変勃発。日本は軍国の道を歩む。正二先輩は軍人を志し、陸軍士官学校へ。

当時、軍人を目指す若者は、陸軍士官学校、海軍兵学校がその関門で、体力、知力が共に備わっていなければ合格できなかった。長井中学からの陸軍士官学校合格者は、正二先輩の前にただ一人、加藤喜兵衛という先輩がいたという。

陸軍士官学校予科に第48期生として入校。総勢388名、同期生として、昭和天皇の末の弟殿下である三笠宮崇仁殿下が入校されている。まことに光栄であったと書いておられる。

世は軍国の道を歩み、正二先輩は優秀な軍人として、その真ただ中を直進した。

昭和16年、小学校が国民学校と学制が変更され、その12月、大東亜戦争へと突き進んだ。

大戦の最中、陸軍^{さなか}大学校を優秀な成績で卒業した正二先輩は、昭和19年3月27日、南方軍参謀に補せられた。参謀とは、高級指揮官の幕僚として作戦・用兵その他一切の計画・指導に当たる将校のことで、情報担当参謀であった。

南方の国々での決戦は非常に厳しくなり、戦況が悪化するなか、日々発表される「大本営発表」の勝利の報告に疑問をもった参謀がおり、その真相を確かめると、確認のない誤報が多いと分かり、



(28歳)

情報参謀として、正二先輩は慌てた。信念の男である先輩は、しっかりこの目で確かめなければ正しい判断や指揮はできない、と、一大決心をして命令のないまま、フィリピンからレイテ島へと向かった。

戦況は悪戦苦闘、惨憺たるもので、闇夜に紛れて残った魚雷艇で脱出した。乗員約20名、しかし、オルモック湾を出るか出ないかのうちに機銃砲火、撃沈。時に夜中の11時半、みな必死に泳ぎ、14時間の後、安全な島に泳ぎ着いた。地図で見るとそれは直線距離で27kmあった。泳ぎ着いた者5名。この時、先輩は右肘に銃弾を受けていたのである。このことは、大岡昇平著『レイテ戦記』にも、高橋参謀として記されている。

このことを先輩が講演で話されたとき、「奇蹟だヨネ」とみな声を吞んだ。——絶望と感じたこのとき、正二先輩の頭の中を去来したのは、南方総軍情報参謀が“命令に反する”独断行動により戦死したら「靖国神社」に祀ってもらえないのでは、ということだったという。

昭和20年に入る頃、戦況は更に厳しく、戦線は縮小、遂に本土への攻撃が始まる。

昭和20年3月1日、高橋正二参謀は南方総軍参謀から軍の中枢の大本営参謀に補され、日本軍の総指揮に関わる任務の命を受ける。大本営とは、戦時、天皇に直属する最高の統帥部である。

サイゴンから東京に着任して間もない3月9日夜から東京大空襲に見舞われた。B29爆撃機延べ350機、焼夷弾2,000トン、死傷者は25万余との記録がある。「南方の戦場の延長戦のような気持ちであった」と書いておられる。

そして、8月6日午前8時15分、広島に特殊爆弾が投下された。

このとき、正二先輩にもう一つの「奇蹟」が訪れる。この6日当日午前10時、広島で第二総軍の関係者会議が行われることになっており、大本営から有末精三中将と高橋正二参謀が陪席することで、前日の5日、所沢飛行場から発とうとした

が、搭乗機のエンジンが故障で、ほかに飛行機はなかった。修理に一日は要するという。急ぎ、大本営に戻っての翌早朝——原爆投下を暗号班からの報告で知る。大本営をはじめ騒然とした大混乱の中、命を受け、翌8月7日、単身、広島に向け出発。調査、情報収集に奔走する。阿鼻叫喚の現地を駆け回ること約10日、輸送手段もままならず、四国を経由して東京に帰還したが、それは終戦の翌日の8月16日だった。広島原爆では約25万余が犠牲になり、生存者も原爆病に悩まされることになったが、直後に現地入りした正二先輩は、やはり白血病に侵されることになる。

もしこのとき、8月5日に所沢飛行場で飛行機の故障がなかったら、間違いなく広島原爆に遭遇していた。これも「奇蹟」だ。

敗戦、終戦

この敗戦は軍部中枢の軍人にとって、どれほどの衝撃であったろうか！

終戦の翌日、大本営に帰還の報告をしたときには、大本営の上司や同僚など多くの自決があった。正二先輩の心も決まっていた。……しかし、敗戦となった我が国には、軍の終戦処理という大問題があり、このことは政府ともども元、軍の中枢の責任でもあった。「敗戦などは認めない。最後まで戦う！」という将兵がかなりいて、この説得や解散、施設・物資の解体などである。

大本営で帰還報告の際、「高橋君、君は東北の出身だったネ」「はい、山形県です」「君に東北の終戦処理をしてほしい」「……」「どうかね」「それはご命令ですか？」「いや、もう命令は出来ない。お願いだ」「……」「考えさせて下さい」「死ぬことはいつでも出来る。人が居ない。これは強^たってのお願いだ。引き受けてくれ」……。

答えを保留して家に帰ったが、——死ぬのはいつでもできる。国のため……、心は乱れ、悩んだが……承知せざるを得なかった。

戦後処理が済むまで……が、次々と重大任務が

先輩を待ち受け、その間の行動が、その後の長い人生を決めることになったと私は思っている。

マッカーサー元帥、厚木飛行場へ

昭和20年8月28日、連合国軍最高司令官、ダグラス・マッカーサーが厚木飛行場へパターン号で降り立つ。その受け入れ団の随員の一人として正二先輩が選ばれていた。このときにも奇蹟に近いことが起きていたのだが（略）

9月2日、ミズーリ号鑑上にて「降伏文書」調印。日本側全権団は重光葵外相、梅津美治郎参謀総長ら10数名、「降伏調印などさせてなるものか」という血気の将兵もいる中、極秘に事は進められたが、このとき、全権団をミズーリ号まで送り届けたのが有末機関の高橋正二先輩らだった。横浜の岸壁からミズーリ号までは、アメリカの駆逐艦ラウンスタウン号により行われたが、早朝6時45分、岸壁を離れたとき、「滂沱^{ほうた}として溢れる涙を止めることが出来なかった」と記している。

——死に場所を意識しながらいろいろな戦後処理に携わる中で、占領軍の「軍票」行使の大問題を、命を賭して阻止した人達のいる一方、掌を返したように占領者に媚びる政治家や元軍人を目のあたりにする中で、心から心酔、敬服して止まないご聖徳の天皇陛下が毅然としてマッカーサーと会見、占領連合国軍最高司令官に感銘を与えた誠の心情に深く感激し、このようなことから、新たに「人のため、国のため」に生きることを覚悟されたと、私は考えている。

ここで私には不思議なことがある。

陸軍士官学校、陸軍大学、太平洋戦争と、軍の中枢を生きてきた正二先輩、戦後は、当然の如く、戦犯に問われる運命にあったと思われるが、そのことの記録も、また聞いたこともない。

「生きて恥をさらすな」という軍人魂もある。戦後、次々の任務を背負い、遂行に尽力していった先輩の気持ちを考えると、想像を絶する思いが

あったに違いない。

戦後、明治薬専に学び、薬剤師となり、更に秋山薬品（株）の社長を務め、請われて、明治薬科大学理事となり、理事長に選ばれ、教育界でも活躍の足跡を残された。

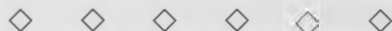
「人のため、国のため」

稀にみる有能な男を、世の人びとは見逃さない。いろいろな団体、グループなど公的・私的に各方面から熱心な依頼が舞い込み、その関係団体などは枚挙に暇がない。どれも会長や理事長など重い責任者で、とりわけ、子どもの教育と国の防衛ではたいへんに尽力された。

また、毎月のように「講演会」を開かれ、世田谷郷土大学講座では、学長として、隔月に講師として、95歳になられた平成20年4月まで、74回の

講演会をはじめ中野サンプラザでは定期的に「母親との教育の会」を開催しておられた。

私は、日・韓・ソ・アジア友好協力会などで講演会を何度か拝聴させていただいたが、先輩の心の根底に棲みついて揺るぎない信念をひしひしと感じて——私などは及ぶべくもない高い山を仰ぎ見る思いであった。



葬儀は近親の者と軍関係者など内輪で行われ、同窓会からは祭壇に供花を献げ、高橋俊龍会長、中島コウ副会長、元副会長の綿谷琴子・木村繁、安部俊彦事務局長が参列した。

9月12日の「偲ぶ会」は200余名の出席のもと盛大であったが、東条英機元首相の孫娘、東条由布子氏も出席されており、同窓会からは、高橋俊龍会長と木村繁が出席し、共に偲んだ。

東京鷹桜同窓会と高橋正二先輩——この項、敬称略す

ここで我々が同窓会のことを振り返ってみよう。

大正9（1920）年2月27日付文部省告示により
山形県立長井中学校設立認可。4月15日に創立開
校式。教職員7名、生徒96名

同窓会結成

大正14年2月、第5学年（第1回卒生）全員が講堂に集まり「長井中学校同窓会」を結成。会則を作成、初代会長は天笠義人校長と定められた。

当時、東京は遠い所だった。暗い世相の中、青雲の志を抱いた若者は進学や職を求めて上京した。

東京の同窓生は、後輩の修学旅行で、上野駅前に一泊する際に必ず相寄っていたが、会の結成まではなかなかの時が必要だった。

昭和20年8月15日 敗戦。

国を覆う絶望の中から人々は立ち上がり始め、我々が先輩の5回生（昭4卒）、4回生の中から東京の同窓会結成の気運が起り、昭和25年秋、昭4卒の渋谷利蔵宅で発足の話し合いが行われ

た。集まったのは、昭4卒の渋谷利蔵、桑島喜平、昭3卒の^{てゐたけ}大国輝威だった。

翌26年初夏、昭3卒の須藤恒雄の勤務する吉野石膏（株）の石膏会館（港区新橋）において創立総会を開き、支部長など役員や会則の基となるものが取り決められた。

名称 山形県立長井中学校同窓会東京支部

支部長 長沼孝三（大14卒）

副支部長 谷口正義（大15卒）

渋谷幸太郎（昭2卒、利蔵の兄）

須藤恒雄（昭3卒）

事務担当 大国輝威、桑島喜平、渋谷利蔵

連絡事務所 渋谷利蔵宅

出席者 13～15名、お酒や料理はなく、お茶とお菓子などでの会合だったという。

一年後、同所で同じようなメンバーで同じように開かれ、「母校に何かしよう」との決議で、当時、就職難の時代の中、就職斡旋案が出て、さっそく母校に伝えられ、私（木村）と同期の昭和28



長沼孝三 初代会長

年卒生ら十数人の就職の世話をした。

しかしその後、しばらく活動が途絶えた。

昭和31年9月16日午後2時から、明治神宮宝物殿隣の休憩所で、お茶とお菓子の総会を開いた記録がある。このときの幹事が高橋正二（昭7卒）と小松栄一（昭8卒）であった。出席者は卒業生24名、会費300円、学生2名、会費100円。

このとき、クラス連絡委員会の組織や、名簿もつくられることになり、本格的な活動に入った。このとき、事務局を正二先輩が社長を務める秋山薬品（株）に置いており、正二先輩たちが東京同窓会のその後の基礎を築いたといえる。

これを機に、毎年、総会や懇親会が開かれているが、会場は、日大病院2階講堂、東急の修学旅行会館、目黒の雅叙園、薬業健保会館などで行われ、昭和35年5月には新宿御苑で、家族ら20余名も参加して、納豆餅で開かれている。納豆餅は「樽平」から、と記録されている。

昭和37年9月、厚生年金会館で開催、「記念写真撮影」と記録があるが、私は見たことがない。

私（木村）が同窓会に出席したのは、翌38年9月、湯島聖堂で、中華料理の総会だった。高校を卒業して10年後だった。その時の幹事は安部欣一（昭15卒）で、受付を頼まれての手伝いだった。

昭和30年代の世話役の中心は高橋正二（昭7卒）、小松栄一（昭8卒）だったようだ。

翌39年も湯島聖堂で行われ、その後、市ヶ谷会館、日本出版クラブ、湯島会館——とつづき、私

は毎年、若輩として幹事の手伝いをさせられた。

この頃、東京の同窓会の中心に佐藤剛先生が存在があった。佐藤剛先生は、大正13年から昭和28年まで一貫して長中—長高と30年間、数学の教師として教鞭を執られ、昭和19年からは校長として……昭和28年3月、私ら昭28卒の卒業生と同時に定年退職なされた先生である。文字どおり、長中・長高の主であり、その教えを受けた同窓生のいつも中心に居られた。その間、自由律俳句の俳人として、山形新聞の俳壇の選者も務められた。

特に、昭4卒の渋谷利蔵、桑島喜平の同期会は、東京の同窓会に佐藤剛先生が出席されるのを機に、その翌日に同期会を開いており、この同期会を己巳会^{きしへ}といい、これは剛先生の命名とさく。昭和4年は干支^{えと}で己巳（つちのとみ）年であることからという。

昭4卒の己巳会は、桜の季節、剛先生の上京される秋の2回、定期的に開いていたが、平成に入り、80歳を超える年齢になると、さすがに出席者も少なくなり、平成元年の同窓会で、渋谷利蔵先輩から、「木村、己巳会に手伝いに来い」との命があり、その後、5回ほど同席させていただき、私のほかに、同期の綿谷琴子、管泰二や、ある時は高橋正二先輩と、わずかになった己巳会の先輩達のアレコレの昔話を聞いた。写真は、平成4年春の会で、撮影したのは綿谷琴子さんである。



(己巳会) 木村繁 高橋正二 (平成4春)
桑島喜平 渋谷利蔵 遠藤玄三郎



高橋忠三 土屋東一 菅七郎 高橋正二 木村繁
 渋谷利蔵 長沼孝三 桑島喜平

(昭和56年役員会—東北沢で)

——昭和38年から10年以上、安部欣一幹事・事務局がつづき、毎年、私は手伝いをしていた。

この頃、昭和24年卒を最後に長井高等女学校は高校として統合されたことから、同窓会も「双鷹会」(中学)と「小桜会」(高女)を一緒にした「^{ようおう}鷹桜同窓会」とされ、仲良く総会を開いた。

昭和50年に入り、事務局の交替があり、昭和26年卒の高橋忠三を中心に、同期の椎名茂、後藤五郎ら、昭26卒の事務局構成となった。

そして昭和55年、母校創立60周年にあたり、10月18日、池袋・東武デパートのバンケットホールにおいて、300人余が集い、盛大な記念総会・懇親会を開いた。

翌56年10月の総会で、初代 長沼孝三会長が勇退され、高橋正二第2代会長が継いだ。

顧問 長沼孝三(大14卒)

会長 高橋正二(昭7卒)

副会長 川野カツ(昭2卒) 吉田志津(昭9卒)

安部欣一(昭15卒) 高橋忠三(昭26卒)

事務局 菅 七郎(昭27卒)

庶務 貴志悦子(昭26卒) 土屋東一(昭35卒)

会計 大谷札子(昭31卒) 末吉暁子(昭36卒)

監査 椎名 茂(昭26卒) 石井宏子(昭37卒)

この頃、組織もしっかり整備され、各学年の幹事も顔を揃え、活動は活発になり、池袋「とり元禄」を会場としたときには、玄関先で餅搗きをして盛り上がったこともある。そして、更なる発展を……と希い、関東在住者全員に同窓会案内状の発送を目指し、事務局を拡充したが、3,000名を超える全員への通知は大変であったことから、学年幹事会で提案があり、その発送作業や総会の各係を毎年、学年ごとに交替で担当することを決し、その第1回作業を昭28卒と昭34卒が担うことになった。結果は大成功。約3倍の220余名が集った。

順調に推移し、平成となり、平成3年春、昭25卒の高橋俊龍先輩が東京都副知事に就任された。その祝賀会を、山形県人会、鷹桜同窓会、首都圏白鷹会の合同で開催、盛大であった。

高橋俊龍先輩は、前年の9月、山形県人東京連合会会長に推戴され、我らが同窓生が県人会の顔となっておられた。

平成7年10月、83歳になられた第2代高橋正二会長が、勇退を決められ、高橋俊龍先輩が第3代会長に選ばれた。

その間、事務局も若返り、土屋東一(昭35卒)



第3代 高橋俊龍 第2代 高橋止二 (バトンタッチ)

弁護士を中心に土屋東一法律事務所で世話になっていた。

その後、順調に……と言いたいのが、少子化などにより上京する者が減少、進学して来た者も卒業して帰郷するなどで、同窓会への関心も薄くなり、関係者が焦せるなか、総会出席者が少なくなっていくた。

平成3年、昭46卒の安部俊彦が神楽坂に新しく「モー吉」という郷土料理居酒屋を開店したことから、開店祝いなどで同窓生が相寄り、それぞれ溜り場ともなっており、同窓会事務局を引き受けていただくことになった。



高橋正二 2代会長 安部俊彦 高橋俊龍 3代会長

(「モー吉」開店祝いで)

安部俊彦(昭46卒)は荒砥町の出身で、ケッコウ頑固者、旨いものにこだわり、酒にこだわり、肉は米沢牛にこだわっている。おバアちゃんに教わったという田舎料理は実にみごとで、巨人軍に



高橋忠三 (26卒) 土屋東一 (35卒)
事務局長

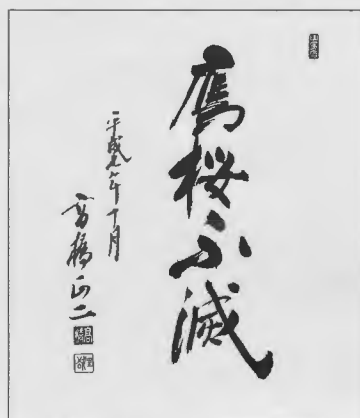
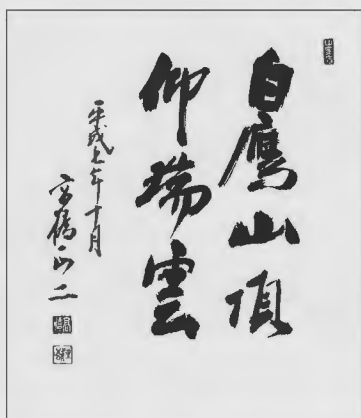
いた大リーガーの松井秀樹は、後楽園で試合後、「モー吉」で食事していたという。大の仲良しだ。

しかし、時代というものだろうか。同窓会は衰退して沈んでいる。この傾向はどの高校も、また大学も同じようである。

コンピュータの進化が人と人とのコミュニケーションの形を変えてしまったと嘆く人も多いが、同じ学び舎で、同じ机で、同じグラウンドで走り回った先輩・後輩の共通の思い、郷土への思いは強いものがあるはずである。

長中が創立して、まもなく100周年を迎える。「偉大な」と言える同窓生が何人か居る。「偉大」にはいろいろな「偉大」があるが、その生き方、言動、最後まで範を示された奇蹟の人、高橋正二先輩を心から偲んでやまない。

【高橋正二 略歴など】 大正2年1月29日生れ 長井中学(昭7卒)、陸軍士官学校(昭11卒)、陸軍大学(昭18卒)、南方総軍参謀、大本営参謀。——戦後、明治薬専(現、明治薬科大学)卒業 歴任など——明治薬科大学理事、(社)日本私立薬科大学協会常務理事。元薬剤師養成問題検討委員会委員(厚生省)。元東京世田谷ロータリークラブ会長。(財)青少年交流振興協会理事。日韓・ソ・アジア・友交協力会会長。世田谷偕行会・世田谷新郷友会名誉会長。世田谷郷土大学学長。世田谷山形県人会会長・山形県人東京連合会副会長。 2008.10月<文責 木村>



平成 7 年10月 第 2 代会長退任に際して揮毫



渡部健二同窓会長挨拶
(平成 7 年総会)

会長
高橋正一

副会長
中島コウ
高橋忠三
安部欣一

司会
斎藤

事務局長
安部俊彦

綿谷琴子